

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720106

研究課題名(和文)『先代旧事本紀』の文献学的研究

研究課題名(英文)Study of the philology of "Sendai-kuji-hongi"

研究代表者

松本 弘毅 (Matsumoto, Hiroki)

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：30434244

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：『先代旧事本紀』の写本についての調査と検討を行い、公にした。鎌田純一の『先代旧事本紀』の写本研究を再検討する必要性は以前から感じていたため、できる限りの写本調査を行った。本研究の結果、やはり鎌田論にも修正の余地があり、また鎌田が検討しなかった写本についても見るべきものがあることがわかったため、それらをまとめて公にした。未調査の写本、また検討を仕切れていない写本も残されているので、引き続き研究を続けていきたい。

研究成果の概要(英文)：I examined it with the investigation about the manuscript of "Sendai-kuji-hongi" and publicized it. Because I always felt the need to reexamine the codicology of "Sendai-kuji-hongi" of Junichi Kamata, I performed every possible manuscript investigation. After all there was room for the correction in a Kamata theory and, as a result of this study, publicized them in a mass because I knew that there was the thing which you should see about the manuscript that Kamata did not examine again. Because the manuscript of non-investigation, the manuscript that cannot partition off examination again are left, it lasts and wants to continue studying it.

研究分野：日本上代文学

キーワード：先代旧事本紀 写本 卜部兼永本 卜部兼右本 石川忠総本

1. 研究開始当初の背景

『先代旧事本紀』は聖徳太子撰の歴史書であると信じられ、平安朝以降尊ばれてきた。しかし近世に至りその偽書性が明らかにされたため、永らく顧みられることはなくなってしまった。そのため研究は近代に入ってもそれほど進展せず、戦後になってようやく鎌田純一による本格的な研究が始められることとなった。

『先代旧事本紀』の諸写本の研究もまた、鎌田純一が体系的、総括的に行った。現在までの『先代旧事本紀』の写本研究は、鎌田純一一人によってなされていると言ってよい(『先代旧事本紀の研究 研究の部』吉川弘文館、1962年。以下「鎌田『研究』」とも)。鎌田の作成した『先代旧事本紀の研究 校本の部』(吉川弘文館、1960年。以下「鎌田『校本』」とも)は、それまでのテキストとはレベルが全く違う、質の高いものとして評価されてきた。その後、同じく鎌田により『先代旧事本紀』テキストが公にされた(神道大系『先代旧事本紀』1980年)が、他の研究者によるテキストは、今に至るまで作られていない。

近年では鈴木正信による国造本紀(『先代旧事本紀』の巻十)に関して、鎌田が紹介していない写本に触れながらのテキストが公にされた(「『国造本紀』諸本の書誌学的検討」『国造制の研究』八木書店、2013年)が、『先代旧事本紀』のごく一部のテキストであり、全体的な研究はやはり鎌田の成果によっているところが大きいものである。

しかし鎌田『校本』も、子細に見れば不明なところが少なからず見つかることも事実である。底本とされたト部兼永本の本文の字、またその傍書には不正確なところがあることが確認できる。また、『校本』出版から既に50年が経過しているが、まだ現在でも定本とされてしまっているところには問題がある。鎌田以外の目による、新しい校訂本が作成されていい時期にある。

2. 研究の目的

現存する『先代旧事本紀』の写本のうち、最重要とされるのはト部兼永本である。この兼永本は『天理図書館善本叢書』に影印が収められており、簡便に見ることができる。しかしその他の重要写本、例えばト部兼右本、石川忠総本といった写本は、所蔵機関に赴かなければ実見することはかなわない。鎌田『校本』の頭注を頼りにするしかないのである。

しかし例えば、先の兼永本影印と鎌田『校本』とを見比べると、不正確な点が少なからず見つかる。実際の兼永本の字と鎌田『校本』のいう兼永本の字とが、一致しない場合はしばしば見つかるのである。また兼永本には「イ本」として他の本との校合をしたことを示す傍書と、他の字かという意味をおそらく

表している傍書とがあるが、鎌田『校本』はこれらを一括りに、「イ本」注記として掲げてしまっている。しかし校合跡か否かの違いは大きなものであり、鎌田『校本』の書き方には大きな問題が存する。そうすると兼永本以外の、実見がなかなか叶わない諸写本についても、鎌田『校本』の正確さには不安が残ることになってしまう。

このように、鎌田『校本』の正確さという点も含めて、『先代旧事本紀』の本文研究は進めにくい状況にあるのが現状であると言わざるを得ない。

以上のような状況に鑑みるに、一度『先代旧事本紀』の写本を調査し直す必要があると考えた。鎌田の研究は大きな成果であるが、鎌田が確認できなかった写本も含めて、もう一度見直す時期に来ていると考えている。

また鎌田は残る諸写本の伝来過程、系統についても多くの論を公にしているが、途中で鎌田自身が意見を変えた写本の位置づけもあり、やはり見直しをする必要があると思われる。

従来鎌田の論で十分とされてきた『先代旧事本紀』の書誌学的研究も、まだまだ再検討の余地があることは明らかである。『先代旧事本紀』写本と本文の研究を一から新たに行うことを、本研究の目的とした。

将来的には、鎌田の成果を批判的に継承した上での、新しい校訂本の作成と公開を目指す。

3. 研究の方法

『先代旧事本紀』の写本は、そのほとんどが現所蔵機関のもとを訪れないと見ることはかなわない。よってまずは各所蔵機関を訪問し、原本の調査を行った。また、可能ならば複写を依頼した。手元に各写本の調査結果と複写を置き、各写本の字や様態を細かに見比べることが最良の方法である。

また『類聚神祇本源』などの伊勢神道書にも『先代旧事本紀』が引用されていることも、以前から注目されてきた。これら関係する書についても目を配り、そこに引用された『先代旧事本紀』本文の性格についても同様の検討を加えることとした。『類聚神祇本源』についても、やはり重要写本を所蔵する神宮文庫を訪問し、調査を行った。

4. 研究成果

(1) 『先代旧事本紀』の写本の調査

以下の『先代旧事本紀』の写本について、各所蔵機関にて原本調査した。また、可能な個所では複写を依頼し、写真版を入手することができた。

- 【京大図書館】
- ・陽明文庫本
- 【静嘉堂文庫】

- ・山田以文本
- 【国文学研究資料館マイクロフィルム】
- ・曼殊院本
- 【國學院大図書館】
- ・中原職忠本
- ・三浦為春本
- 【神宮文庫】
- ・石川忠総本
- ・村井古巖本（巻二まで）
- 【天理大図書館】
- ・ト部一本
- ・ト部兼右本
- ・吉田良熙本
- ・八雲軒本
- ・隠顕蔵本
- ・神楽岡庫本
- ・中臣連重本
- ・延春本（巻六のみ）
- ・神代本紀
- ・巻第一及び二
- 【宮内庁書陵部】
- ・秘閣本
- ・谷森善臣本
- 【無窮会図書館】
- ・楓山本
- ・白雲書庫本
- 【国立公文書館】
- ・徳川光圀本
- 【国立歴史民俗博物館】
- ・下冷泉本
- 【東大史料編纂所】
- ・徳大時本
- 【尊経閣文庫】
- ・前田綱紀本

（２）『類聚神祇本源』の写本の調査

以下の『類聚神祇本源』の写本について、所蔵機関にて原本調査した。

- 【神宮文庫】
- ・度会実相本
- ・大中臣定美本

（３）ト部兼右本『先代旧事本紀』巻一・二の翻刻

ト部兼右本『先代旧事本紀』の第一冊にあたる、巻一・二の翻刻を公にした。兼右本はこれまで、鎌田『校本』の頭注を見るしか本文の様態を知る術はなかったが、本翻刻により広く兼右本そのままの状態を見られるようになった。兼右本は兼永本とは違う系統の写本との見合わせ跡があるとの指摘がされており（鎌田『研究』）鎌田『校本』を通してではなく、写本の様態を細かく見られることが待たれていた。第二冊以降についても、後に公にするつもりでいる。

（４）ト部兼右本『先代旧事本紀』と『類聚神祇本源』引用『先代旧事本紀』の検討

兼右本と、『類聚神祇本源』が引用する『先代旧事本紀』とが特に関係することは、鎌田純一が早くから注目していた。本研究では『類聚神祇本源』の室町期の写本と兼右本『先代旧事本紀』、また参考としてト部兼永本『先代旧事本紀』を比較調査し、互いの親疎を明らかにした。特に兼右本ばかりが『類聚神祇本源』所引本文と関係を持つのではないこと、『類聚神祇本源』所引の『先代旧事本紀』本文は、原本により近い性格を持つことを推定した。

（５）石川忠総本『先代旧事本紀』の系統的
位置づけ

鎌田純一も重要視した石川本の位置づけについて、近い関係にあるとされるト部一本も比較しながら、その性格と写本系統的位置づけを考えた。鎌田によれば祐範本（今存在が確認できない）に近い写本であるとの位置づけである石川本であるが、本研究で、祐範本とは関係ないと考えられること、また兼永本の流れをくむ写本であることを明らかにした。

また、鎌田はあまり注目しないト部一本であるが、実際のところ石川本よりも親本の様態をより残している写本であり、見るべき写本であることも併せて述べた。

（６）『先代旧事本紀』写本全体の概観

2015年4月に予定されている学会発表では、『先代旧事本紀』の写本について、本発表で知り得たことを公にする。特に石川本の位置づけには鎌田論には修正の余地があること、石川本をめぐって写本系統全体を見直す必要があることを論じる。鎌田論を更新することにより、『先代旧事本紀』の本文研究を推進できることについても述べる。また、これまで触れられてはこなかった、徳大寺本やその他いくつかの写本の存在についても言及した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

1. 松本弘毅「石川忠総本系『先代旧事本紀』の写本系統的位置」(『早稲田大学日本古典籍研究所年報』8) 査読なし、2015年、1-18頁。
2. 松本弘毅「『先代旧事本紀』ト部兼右本と『類聚神祇本源』引用『先代旧事本紀』」(『古代研究』48) 査読なし、2015年、46-67頁。
3. 松本弘毅「翻刻・天理大学附属天理図書

館蔵 ト部兼右筆本『先代舊事本紀』第一冊(序・巻一・二)、『古代研究』47) 査読なし、2014年、42-63頁。

〔学会発表〕(計1件)

1. 松本弘毅「『先代旧事本紀』の諸本をめぐって」古事記学会、2015年度4月25日予定、学習院女子大学(東京都新宿区)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 弘毅 (Matsumoto Hiroki)

早稲田大学 文学学院 助教

研究者番号：30434244

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし